

日本のスキー場に未来はあるか

— 矢口流・雑学的考察 —

2013年01月

NPO法人 元気・まちネット 代表理事
スキーとトライアスロンのチームBEARS主宰

【時代とその背景】

昨年(2012年)に引き続き今年も日本海側から北海道にかけて豪雪に見舞われている。

これは喜んでいいのかそれとも悲しむべきことなのか・・・

1986年(昭和61年)から始まったバブル景気を背景にしたカネ余り現象もあって、地域振興策に悩む地方では大いに期待され、ほとんどの道府県が計画策定に取り組んだ。

1987年(昭和62年)総合保養地域整備法(通称:リゾート法)が制定されると、スキー場やゴルフ場の乱開発が進み、同年11月に公開された映画「私をスキーに連れてって」がスキーブームに火を点け、併せてスキー場の乱開発に追い打ちをかけるようになった。

しかしそのバブル景気も長く続くことはなかった。

バブル景気は1986年終わりから1991年始めまでの約4年間を指すが、絶頂期の1989年(平成元年)には投資が活発になり、12月の大納会では株価38,915円まで値を上げたのをピークにバブルは崩壊していく。

1989年(平成元年/昭和64年)1月7日、昭和天皇が崩御、元号が平成に改められた。この日は仲間と石打丸山スキー場に出かけていて起床したら外は雨、テレビを点けると、どのチャンネルも葬送進行曲が流れていたのを今も鮮明に覚えている。

バブル崩壊が始まった1991年、イギリスのバーミンガムで6月開催された第97回国際オリンピック委員会総会で長野オリンピックが決定された。

1993年前後のピーク時には国内のスキー場は800ヶ所を数えたが、バブル崩壊やサブプライムローンから始まったリーマンショック、平成大合併などもあり、スキー場の数は500ヶ所を割った。

1990年頃からの20年間は「失われた20年」とも言われる。

【私とスキーの出会い】

日本のスキー界をけん引してきたSAJ(全日本スキー連盟)から、1968年(昭和43年)SIA(日本職業スキー教師連盟/1972年協会から連盟に名称変更)が設立された。

戸隠高原プロスキースクール(以下:戸隠PSS、校長木村博(故人)、主任コーチ菟場(ぬたば)敏夫、半田幸雄)は、志賀石ノ湯パラレルスキースクール(校長平沢尚忠)から独立して戸隠高原(越水ロッジ/越水ヶ原)に戸隠PSSを開校した。

(半田幸雄は私のふる里戸沢村での先輩にあたる。現在は宮城蔵王プロスキースクール主宰)

蔵王で開催された第10回インタースキー(1975年、スキー指導者会議)にSIAは初参加してデモンストレーションを行い、菟場敏夫はSIA代表メンバーとして演技した。

(菟場敏夫とは大阪支社勤務時代に四条畷市にアパートを借りて2年間過ごした。)

1969年(昭和44年、22歳)、戸隠PSSに半田幸雄を訪ねたことで、私のスキー人生がスタート、3シーズンに渡ってパラレルスキーの基本から徹底的に指導を受けた。

1972年(昭和47年、25歳)に新赤倉スキー学校(主任コーチ/SAJデモ:庄司幸夫、後に竹田と改姓。ロッジ雪だるま)で石川秀雄とSAJ1級を取得、その後2シーズンに渡って正月や連休の繁忙

期に新赤倉スキー学校の手伝いをするようになる。

また石川秀雄と戸隠PSSで知り合った仲間数名でWSC(ワンダラーズスキークラブ、5年で自然消滅)を設立、網張、志賀高原、蔵王、蔵王坊平、月山スキー場などに遠征して技術向上とスキーの楽しさを追求する。

先輩の森正幸に1967年(昭和42年、20歳)に連れて行かれて滑ったのが蔵王スキー場との出会だった。「とにかく広いスキー場だなあ〜」という印象が今でも脳裏に焼き付いている。

1972年(昭和47年、25歳)シーズン、会社のスキー仲間(森夫妻、中島夫妻、吉田夫妻)と蔵王スキー場(蔵王三五郎小屋)に行くようになり、蔵王での本格的なスキーライフが始まる。

蔵王三五郎小屋をベースに多忙な時期は石川秀雄と厨房に入り、料理の下ごしらえやカウンターで珈琲を淹れながらその合間に滑るスキーが楽しみとなった。

1973年、SAJ指導員を目指し、通い慣れた戸隠高原スキー場で宿泊した「ヒュッテやちぼうず」でアルバイトをしていた愛川(富山県出身、通称:愛ちゃん)と滑り、彼の滑りに驚くとともに、ただ単に資格にこだわる愚かさに気づかされる。以後、資格云々ではなく誰がみても“上手くて、楽しいスキー”を目指そうと決心する。

1975年(昭和50年、28歳)、これまで10年勤務した日本技術開発株式会社を退社して石川秀雄(富士ゼロックス㈱退社)と共にドッコ沼畔の蔵王山荘(1986年:蔵王国際高原ホテル新築、2011年:春解体)をベースにプロスキーヤーとして活躍する鈴木康容(通称:やすさん)に3シーズン師事、スキーコーチとして認められたことが、スキー人生に於いてSIAの資格よりも一番嬉しい出来事であった。以後鈴木、石川、矢口に前田、永田を加え週末になると代々木公園に於いてスキーのオフトレをするようになる。

同年、SAJの旧体制に嫌気を覚え、SIAの指導者を目指し、蔵王スキー場で助手検定資格を取得してSIA会員となる。その後、助教・正教師を目指したが、再就職(㈱田中造園土木設計室)したことなどで受験する機会を失った。

1987年(昭和62年、40歳)㈱石井スポーツの石井昇常務にクラブ設立を勧められ、石井スポーツスキークラブ(通称ISSC)を設立、コーチ陣は斉藤薫(SAJ指導員山形)、橋田修治(青木湖スノーコルプロスキースクール主任コーチ)、矢口正武、野ロー平(SAJテクニカルプライズ)、松浦保の5名で、翌1988年(41歳)正月、蔵王スキー場(蔵王国際高原ホテル・パラダイスロッジ/両ホテル共その後解体)からISSCの活動がスタートした。

ISSCは1998年(平成10年、約10年間、51歳)まで活動し発展的解消した。

戸隠PSSの仲間だった滝沢哲夫・暁子夫妻がロッジ珈楽待を、妙高池ノ平で料理人をしていた山崎秀夫がピザハウス樹安亭を青木湖畔に開店するようになり、青木湖スキー場(2010年から休業)を第二のホームゲレンデにするようになった。

1978年(昭和53年、31歳)頃から仕事仲間(建築家青野)から水泳に誘われ、スキー仲間の牛丸

よりオフトレとして自転車(ロードバイク)を進められ、スイム・バイク・ランを取り入れたことがきっかけとなり、1992年(平成4年、45歳)スキーとトライアスロンのチーム「BEARS」を結成、初合宿を青木湖(ロッジ珈楽待)で8月から本格的に活動を開始した。

長野県小谷温泉山田旅館主:山田誠司からテレマークスキーを薦められ、2005年津田沼ヨシキスポーツで購入、2006年(平成18年、59歳)シーズン始めから、妙高バックカントリースキースクール本宮コーチに指導を受け、テレマークスキー(BC:バックカントリー)も楽しむようになる。

2006年(平成18年、59歳)10月、NHKで放送された“そのとき歴史が動いた—白洲次郎—”を観て、元勤務先の社長永山時雄と白洲次郎の濃密な関係を知るようになる。

白洲次郎が東北電力会長時代の1957年(昭和32年、10歳)蔵王に山荘「ヒュッテ・ヤレン」を建てスキーを楽しんだことを知り、2011年(平成23年、64歳)所有者三宅泉・美樹姉妹の承諾を得て「旧白洲次郎山荘保存・活用の会」を結成、蔵王でスキーを楽しみながら現在に至る。

<矢口流スキーの楽しさとは・・・>

一概にスキーの楽しさを論じることは出来ないが、矢口流の楽しさを挙げてみよう。

- ・ 自然(白銀の世界)と一体となれること。吹雪、大雪、青空、樹氷、霧氷、ダイヤモンドダストなど都会で暮らす人間にとって非日常の世界が体験出来る。
- ・ 日常から非日常へ、仕事(都会)からレジャー(雪国)へ、全身が一気に解放された感覚(浮遊感)を味わえる。
- ・ 買い物や食歩きの観光に、プレイ(スキー)する楽しみが加わる。
- ・ 仲間とお酒を飲みながら技術論、それぞれの仕事や趣味について語れる楽しさがある。
- ・ 新しい仲間との出会い、一人で滑ることも仲間(団体)で滑ることも可能なスポーツ。
- ・ スキー技術の奥深さを追求出来る。段階的に上達していく楽しさが味わえる。
- ・ 新雪、深雪、良く整備されたバーン(白いキャンバス)に思い思いの絵を描ける。芸術家になつたような気分を味わえる。
- ・ スキーファッションをあれこれイメージする楽しさがある。
- ・ スキーやスノボだけでなく、クロスカントリースキー、スノーシューハイク(かんじき)やチュービング(ゴムボート)などのスノースポーツも楽しむことが出来る。

<雑誌:極楽スキーの発売>

スキー全盛の1987年(昭和62年、40歳)この年、小学館から雑誌「極楽スキー'87」発売。この雑誌にフランスのタイヤメーカー「ミシュラン社」が年に一度ドライバーの為のレストラン・ガイドの愛称で、秘密調査員を派遣して味とサービスを評価したレストラン界の最高の権威を持つ「ミシュラン・ガイド」がある。この方式にならって、極楽スキーでは「ゲレンデ・ミシュラン」を作成した。評価は10項目からなる。

- ① コースの面白さ

- ② 景色の良さ
- ③ 雪質
- ④ 混雑度
- ⑤ ゲレンデ内のしく時・休憩施設の充実度
- ⑥ リフト設備の新しさ
- ⑦ 宿泊施設の快適性
- ⑧ 宿→ゲレンデへのアクセス
- ⑨ 客層
- ⑩ アフタースキーの娯楽性

★印は5つを最高としたが、現時点では3つ星が最高だった。

私がホームゲレンデにしている蔵王スキー場をこの「ゲレンデ・ミシュラン」から見てみよう。

「ビッグ・スピリッツ」読者アンケートでは白馬・八方について堂々の2位だった。

しかしスキー場の評価は厳しく、欄外に追いやられていた。

◇蔵王の評価

人気スキー場の、堂々2位をしめるのがここ蔵王。12のゲレンデと6本のロングコースがあるスキー場というのは、日本有数といって良い。サラサラのパウダースノーだし、樹氷原も絶景だ。だが、宿、食事、設備 etc、すべてダメ！・・・

冬はスキー客が中心だ。名ばかりの乾燥室、暗〜い部屋、クモの巣のはった押し入れ、汚れた洗面所、迷路とおぼしきつぎはぎだらけの旅館内部・・・聞けば、地下に流れるのが強い酸性の温泉であるために地盤が弱く木造の建物しか作れない。テレビの寿命も3年、など持って生まれた性のおかげで苦勞が多いという。同情はするが、ダメなものはダメ！

ゲレンデの食事は、あきれれるほどまずい。パラダイスロッジや三五郎小屋ではカレーすら食べられない。庄内平野の美味しい米どころのはずなのに、ご飯はベチャ。この手の食堂が蔵王に多い。

ちなみに三つ星は「焼額山・奥志賀、ニセコ」、二つ星「八方、アルファトマム」

◇蔵王からのメッセージ/みなさんいい加減なこの本の言うことなんかには耳を傾けないで下さい。

蔵王は今年のあるアンケートで「行ってみたいスキー場」で1位になりました。

皆様のご協力に感謝します。多くのスキーヤーの皆様がこの蔵王に来てみたい、行ってみたいと思っていて下さることはこの上なく幸せです。「イメージ」としての蔵王は大変に人気がありますが、反面では「もう一度行ってみたいスキー場」になりますと、いまいち低迷しているのは地元でも充分認識し、改善の方向で住民一丸となって運動を展開中です。皆様の楽しい・充実したスキー旅行のお手伝いをしたいと思っております。・・・と言うわけで、蔵王は立派な5つ星です。

“今、山形市では1998年の冬季オリンピック誘致運動を展開中です”

1989年(昭和64、平成元年、42歳)「極楽スキー'89」が発売。

「極楽スキー'89」は、スキーをリゾートという観点から検証した、徹底した遊びの本である。このこ

とは「極楽スキー'87」と変わりはない。もう一つここで付け加えたいのは、ユーザーサイドからリゾートを考えているということである。

日本リゾート選手権では日本人の臨むリゾートとはどんなものか。(財)余暇開発センターが行ったアンケート調査によれば、自然環境に恵まれたリゾートを志向する自然環境派、都市感覚よりは素朴さや伝統性に憧れ、故郷やひなびた温泉などを志向する伝統文化派、自然環境派に生活やスポーツというアクション的要素を加えたアウトドアアクション派、都市感覚を持ちつつも、国際的な雰囲気や異国情緒など非日常性が強いリゾートを志向する脱日常派、洗練された都市文化の中で、楽しさを味わいたいアーバンリゾート派の5つに分類出来るという。

この中で、自然環境派が38.7%、最も多く、次が31.5%の伝統文化派。どちらも静的で非活動的なリゾートの型だが、両方合わせると7割を占める。

つまり、このタイプのリゾートが、日本人には合っているということになる。

今、全国で進められているリゾート計画は、この分類でいくとアウトドアアクション派のイメージに近いが、現状では16.1%と低い数字である。30代以下のヤング層にこのタイプを考えている人が多いことから、今後に望みはつなげそうではあるが、官民すべて合わせたスキーリゾート計画は28ヶ所もある。これらが全部計画通りできたとして、一体、誰が行くというのか。スキー人口は、ここ数年、ほとんど変わらないのである。計画中のものはもちろん、既存のスキーリゾートも生き残っているのだろうか。

今回の「ゲレンデ・ミシュラン」で蔵王はどういう評価を得たのであろうか。

結果は今回も残念ながら欄外に追いやられた。

◇蔵王の評価

あの冬季五輪の開催地に堂々と立候補して、思いっきりはずして下さいました。0票ですよ、0票。いくら参加することに意義があるオリンピックといっても、これは極論です。・・・蔵王の宿泊施設、および各食堂に先シーズン「ご飯がマズイという投書が来ています。みんな注意しましょう」という回覧板が回された。

ちっとも変わらないのが蔵王の凄いところ。ご飯は昨年同様、本当にこれが日本有数の米どころ山形のササニシキかと疑いたくなるくらいベチャベチャしてるし、こちとら一人で行っているにもかかわらず、見ず知らずのグループに入れられてジンギスカンをつつき合う始末。

メシがまずい上に、サービスの向上も見られない蔵王、いやはや今年も星はなし。

ちなみに三つ星は「焼額山・奥志賀、サホロ」、二つ星「ニセコ、八方、安比高原」

◇蔵王からのメッセージ/“負けるが勝ち”

冬季五輪でJOCの方からは、会場をコンパクトにするようにと指摘され、実際そうしたのに、結果は「まったくコンパクトでない長野」が国内候補地に決まった。

早い話が、蔵王は幅が広がって事。「安い宿」から「立派な高い宿」まであるってことよ。予算に応じて選べるっていいでしょう。宿が汚いだのというけれど、これこそ、日本の由緒正しき温泉場の雰囲気

気を持っている事の証、ってか。

これからの蔵王は一度に3倍楽しめる場所になるのです。

こんなこと、新興のスキー場には、真似出来まい。仲間達の趣味や価値観が違っても、同時に一緒に楽しめる「ワンダフル・ワールド」それが「蔵王」なのです。

【日本のスキー場(界)の現状(1)】

1972年2月、日本およびアジアで初めて開催された冬季オリンピックで、スキージャンプ70m級(現在のノーマルヒル)では、笠谷幸生が1位、金野昭次が2位、青地清二が3位と、日本人が冬季オリンピックでは初めて表彰台を独占した。このメダル独占は、のちに日本のジャンプ陣が日の丸飛行隊と呼ばれるようになるきっかけにもなった。

本大会の開催前に、オリンピック憲章(アマチュアリズム)をめぐる大きな論争が巻き起こり、報酬を受け取ったとされる40人のアルペンスキー選手の参加資格を剥奪すると発表、オーストリアのカール・シュランツは出場を認められなかった。この結果は「金持ちしか五輪に出られなくなる」と選手たちから反発を浴びた。シュランツはその後1989年に復権している。(ウィキペディアから抜粋)

滑降コースとなった恵庭岳で世界の精鋭たちが精神と肉体を競い合い、国内初の冬季五輪は成功のうちに終了したが、多くの問題も抱えることとなった。大会終了後に自然に戻すために数多くの木々が植林されましたが、今でも冬になるとコース跡が斜面に浮き出てきます。自然ってそう簡単に取り戻す事ができないことを訓えてくれました。

環境破壊については、これから先も、人間は自然を支配することはできないし、自然は人間の思い通りにはならないということを教えてくれた。(恵庭岳登山案内より抜粋)

1980年代から1990年代まで空前のスキーブームは続き、スキー人口は1,800万人とも2,000万人とも言われた。

当時は情報も乏しかったこともあり、冬のスポーツと言えばスキーかスケートが定番スポーツだった。池袋にある豊島清掃工場(1999年竣工、元池袋マンモスプール)、千駄ヶ谷の神宮屋外フットサルコートは昔、屋外プールで冬はスケート場(2002年、平成14年閉鎖)だったことを知っている人は少なくなっている。

スキーショップの集まるお茶の水界隈は週末になるとスキー板やグッズを持った人で溢れかえり、歩道をゆっくり歩くことさえ困難な状態だった。9月1日から各地のスキー宿の募集が始まるのだが、スキーシーズン中の週末は早々に予約で一杯になった。

深夜高速バスが新宿安田生命ビルの隣から出発することが多く、夜ともなれば新宿駅周辺はスキー客でごった返した。あまりの多さに集合場所は秋葉原や神田、後樂園などに移っていった。

リゾート法が1987年に制定されると、余暇活動を楽しめる施設(特にスキー場)が各地に開発されて行った。この年の11月「私をスキーに連れてって」がブームに火を点け、翌年の1988年リクル

ート事件に発展して話題となった安比高原スキー場は、(株)リクルートの創業者江副浩正(2013年没)が1981年(昭和56年)に開業したスキー場である。

スキーブームに陰りが見え始めた1998年2月、長野市とその周辺を会場にして国内では二度目となる長野冬季オリンピックが開催された。

日本ジャンプ陣(日の丸飛行隊)を初めとする日本選手が大活躍、日本代表は冬季五輪史上初の2桁獲得となる合計10個(金5・銀1・銅4)のメダルを獲得した。

日本選手の活躍でオリンピックは成功裏に終わったが、冬季オリンピックには環境破壊が付物となってしまう感がある。

長野オリンピックが引き起こした自然破壊としては、競技会場の建設による自然破壊(飯綱高原、白馬村ジャンプ台、八方尾根等)、オリンピック関連道路の建設による自然破壊(志賀高原、飯綱高原等)、高速道路、新幹線などの建設に伴うリゾートの乱開発などが挙げられる。

1999年6月、Mt.6(マウントシックス)は野沢温泉、蔵王温泉、草津温泉、白馬・八方尾根、赤倉・妙高高原が、「リゾート文化の創造と継承」を誓い合って組織された。

互いに情報交換を行ないながら、より質の高いサービスを皆さまにご提供したいと考えています。この6カ所の山岳リゾートは、ウインタースポーツの王者であるスキーと温泉を中心として発展してまいりました。・・・と、高邁な理想を掲げてスタートしたが、Mt.6が残したことと言えば、6スキー場で使える「共通リフト券」の発券だけだった。

「スキーリゾート振興を目指した当初と現在の方向性の違い」などを理由に、2009年5月末限りで志賀高原は脱会することになる。

こうしてバブル崩壊と共に各地に開発されたスキー場は相次いで休業・廃業や管理運営会社が替わっていった。主なスキー場を挙げてみよう。

- ・ 1997年:宮城蔵王(宮城)、大鱈温泉(青森)
- ・ 1998年:アルファトマム(北海道)
- ・ 2000年:サホロリゾート(北海道)、ネコマ(裏磐梯)
- ・ 2001年:県営田沢湖(秋田)、天元台(山形)
- ・ 2002年:八幡平リゾート(岩手)、アルツ磐梯(福島)、八ヶ岳ザイラーバレー(長野)
- ・ 2003年:安比高原(岩手)、神立高原(新潟)、グランデコススキーリゾート(東急電鉄→東急不動産、福島)
- ・ 2004年:アルファリゾートトマム(北海道)、木曾駒高原(長野)、黒姫高原(長野)
- ・ 2005年:岩手高原(雫石、岩手)、妙高バインバレー(新潟)、川場スキー場(群馬)、北志賀竜王(長野)、ハンターマウンテン塩原(栃木)、おんたけスキー場(長野)
- ・ 2007年:猪苗代(福島)、富士見パノラマリゾート(山梨)、西武Gが不採算の施設を売却(ニセコ東山H・ニセコ東山HG・ニセコ東山S・ニセコG・真駒内S・函館七飯S・鱈ヶ沢H・

鱒ヶ沢S・鱒ヶ沢高原G・津軽高原G・田沢湖H・森吉S・阿仁S・湯沢中里S・燕温泉S・。(※Hはプリンスホテル、Gはゴルフ場、Sはスキー場)

- ・ 2008 年: 磐梯国際(福島)
- ・ 2009 年: 岩原スキー場(新潟)親会社「ナベプロ」が資金援助を行い営業は継続。
- ・ 2010 年: 青木湖(長野) から休業
- ・ 2011 年: 小野川温泉(山形)市長が 2010 シーズン一杯で廃止の意向を表明
- ・ 2013 年: ニセコチセヌ(北海道)、大石田里山スキー場(山形)

(磐梯ひじかたスキースクール参照)

【日本のスキー場(界)の課題(2)】

何故日本のスキー場は衰退していったのか？

友人でもある専修大学商学部教授:大林守は専修大学商学論集第 93 号(2011 年 7 月)に「日本のスキー人口はどこまで滑落するか？」という、経済学的知見から衝撃的な発表をしている。

私は 22 歳から本格的にスキー技術を習得、指導的立場からまた、本職であるランドスケープアーキテクト(造園家)として「リゾート、都市公園の計画・設計、住民参加のまちづくり」の立場からも、ウィンタースポーツの花形とも呼べるスキーに接して来た。

1988 年北海道のKスキー場を開発するにあたり「これからのスキー場とは、一現状と課題」を(株)爽環境計画代表:木村隆とまとめた。

2000 年 8 月、バブル崩壊と共に衰退していく各地のスキー場を「地域活性化」に繋げようと長野県サンアルピナススキー場(佐野坂、青木湖、鹿島槍)や仁科三湖(青木湖、中綱湖、木崎湖)を活用し、地域活性化を目指すアウトドア・スポーツイベント「北アルプス山麓AdventurGeames2001」(通称:北アド)開催、2009年(平成21年、62歳)までの10年間スポーツイベントを企画・運営した。

その後も「北アド大会」は後輩達の手によって2012年現在も続いている。

2003 年(平成 15 年、56 歳)「仁科三湖縦断アドベンチャースイム&ラン」(通称:スイムラン)を2010 年(平成 22 年、63 歳)まで 8 年間続けたが、諸般の事情により休止中。

2010 年 10 月、長野県飯山市戸狩温泉スキー場伝刀支配人より「アウトドアスポーツを取り入れ地域が一体となれるイベントを考えて欲しい」とオファーを受け、信越トレイルや戸狩スキー場周辺を活用した「戸狩とんトレ 伝」(継続中)をプロデュースした。

2007 年 11 月池袋サンシャインシティ、2008 年 6 月北海道ニセコ東急に於いて「マウンテンリゾート再生のための環境会議」をプロスキーヤー平沢岳と企画・実施した。

2010 年 11 月、長野県大町市に於いて「北アルプス山麓の健康・環境・観光を考える」地域活性化シンポジウムを松本大学等々力賢治教授と企画・共催した。

「地域(方)の活性化」を目指した任意活動団体「元気・まちネット」は、2008 年 8 月、NPO法人格を取得、「NPO法人元気・まちネット」を設立、2009 年 7 月市ヶ谷法政大学で開催された「地域活性化学会/第一回研究発表会」で専修大学教授大林守、神原理に論文作成の協力を得て「北アル

プス山麓AdventurGeames2001 大会/地域資源を活用した参加型スポーツイベント」を発表した。
こうした背景を踏まえ、何故日本のスキー場は衰退したのか、矢口流雑学的考察をする。

＜考えられる主な要因＞

- 1) 少子高齢化
 - ・ 私は 1947 年(昭和 22)生まれの団塊世代でスキーを謳歌、二人の子供は団塊ジュニアでスキーよりもスノーボードに夢中
 - ・ 少子化でスポーツ少年団(通称:スポ少)に入る子供が減少
- 2) ライフスタイルの多様化
 - ・ ウィンタースポーツと言えばスキーかスケートしか選択の余地はなかった時代から、情報化社会になると、旅行(レジャー)の形態そのものが大きく多様化した。
 - ・ レジャーも「安近短」を求めるようになり、「高遠長」のスキーなどは敬遠されるようになった。
- 3) 経済事情の悪化
 - ・ スキーブームだった 1980 年～1990 年代はバブル絶頂期で、高額なスキー用具を毎年買い換える人が多く存在した。
 - ・ スキー(スノボ)用具、移動費、宿泊費、リフト券などすべてに於いてお金がかかる。
- 4) 地球温暖化による降雪量の変化
 - ・ 地球温暖化に伴い雪の降り始めが遅く、ウィンタースポーツにおける影響が大きい。
 - ・ 雪の降り始めが遅くなるとスキー計画の予定が立てにくい。
- 5) スキー(エリア、宿)の劣悪な環境
 - ・ スキー場内のゲレンデ食堂(通称:ゲレ食)、及び宿の食事の不味さ、価格にも問題。
 - ・ 乾燥室を始め、トイレ、風呂・洗面所など水回りの劣悪な設備環境。
 - ・ 索道会社、旅館組合、バス会社などの連携の悪さ。
 - ・ 長引く不況により、スキー場周辺の施設(宿、みやげもの店)が廃業し、建物の取り壊しが進んでいないため、まちの景観が破壊されている。また防犯・安全に於いても問題有り。
- 6) スキー指導の問題
 - ・ スキー技術に特化した指導法、「安全に楽しいスキー」指導はどこかに追いやられた。
 - ・ カービングスキーの普及により、従来のノーマルなスキーより、鋭くカービングするためコントロール不能に陥りやすく、ゲレンデ内での事故が多くなった。
 - ・ 事故が多くなった理由には、整備されたゲレンデを大きくターンをするプレイヤーが増え、脚力のないスキーヤーはコントロール不能に陥り事故が急増している。(スノボも同様)

【日本のスキー場(界)の将来展望】

- 1) 人口(日本の総人口、スキー人口)動態の変化とレジャー志向の多様化への対応
 - ・ 少子高齢化が加速し、現在のターゲットになっている団塊世代や団塊ジュニア世代のニーズに対応した取り組みが求められている。

- ・「歩くスキー」、「スノーシュー(かんじき)ハイクで自然観察」、「温泉めぐり」、「食べ歩き/まち中散歩」など新しい魅力づくり。
- ・スキーの楽しさとは何か、指導者、関係者の変革が求められている。
- ・スキー場を取り巻く自然景観、まちの歴史・文化などを発掘し発信ことが求められる。
- ・スキー客の多くは都市圏からの流入が多く、都市圏に住む人のニーズを知る必要が求められる。

2) スキー場のある(抱える)まちづくりへの対策

- ・これまでスキーシーズン(冬)だけの季節労働的な経営だったが、これからは四季を通じた経営が求められる。
- ・冬場だけの営業だったため、「まちの景観的価値」を見落としていた。廃業した施設(宿、みやげもの店など)、不統一なデザインの看板・案内板などの撤去して統一されたデザインのサイン(案内板など)設置。
- ・すてきなカフェ空間があまりにも少ない。都市圏から訪れるお客さんのニーズに対しての対応が求められる。
- ・スキー以外のスポーツ(トレイルランニング/通称:トレラン、ウォーキング/ランニング、アドベンチャーレース)やまちのイベントとコラボレーションしたイベント開催により、多くの誘客が求められる。

3) スキー場の経営改善

- ・これまではスキー場が地域経済を支えてきたが、スキーヤー(スノボ含む)の減少でまちの財政を圧迫している。地域が一体となった取り組みが求められている。
- ・財政事情が厳しい今日、市町村が経営するスキー場は経営の効率化(B/C:費用対効果)が求められる。
- ・レンタルスキー(スノボ、ウェア、ブーツなど)の充実、スノーシューハイク(かんじき)のエリア拡充と人材育成が求められる。
- ・BC(バックカントリー/山スキー)は、オフピステ(整備・管理されていないエリア)を活用するため、安全対策などのルールづくりが早急に求められる。
- ・女性客のニーズ(トイレ、パウダールーム、授乳施設)に対応した施設整備が求められる。またカフェやレストランなどにはウェア、ブーツ置き場(ロッカールーム)の施設充実。
- ・子供を預けられる託児所、また子供のための雪遊びメニュー(かまくら、雪だるまづくり、そり、チュービング)の充実と人材育成が求められる。

4) 社会教育の一環としてのスノー(スキー)スポーツ

- ・スキー授業は雪国の特性を活かし、冬期間屋外で身体を動かし、生涯を通じてスキーを「安全に楽しく」学べる効果的な屋外授業である。
- ・スノースポーツ(スキー)の活動を通して、集団活動、ルールやマナーなど社会性を身につけることができる。

【スキースポーツへの想い】

スキーを始めて今年(2013年)で40年が過ぎた。

人生の2/3をスキーに費やして来たことになる。スキーの実力としては三流ではあったが、一言では言い表せないほどスキーから学んだことは大きかった。

SIA受験のあと講演した杉山進は「スキーは両刃の剣である。扱いを間違えると大変なことになる。20歳前後のスキーコーチが例えば、普段であればお付き合いする機会など滅多にない一流企業や素晴らしい人生の諸先輩方を教える場合がある。スキーの技術だけでなく普段の生活態度にも気をつけなければならない。云々・・・」と話されたことは今でもはっきりと心に残っている。

スキーを教わることで人を敬うことや教えることで学ぶことは多々ある。

【まとめ】

スキー場を抱えたまちはこれまで冬場だけの季節労働的経営に終始してきた。

雪が消えれば、雪害で痛んだ建物や給排水設備などの修繕などでグリーンシーズン(春・夏・秋)をやり過ごしてきた背景がある。

これからはスキーを冬場の一つのアイテムと捉え、春は樹木や草花の芽吹き、夏は新緑、秋は紅葉など、日本の四季に合わせた自然景観や旬の食文化、祭りなどの伝統文化と重ね合わせながら、地域の魅力づくりを再構築して世界に向け情報発信する必要に迫られている。

また乱開発され活用しなくなったスキー場には植林運動などを行い、かつてあった里山景観を再生することで、日本の美しい自然景観を取り戻すことが将来を担う世代に対する責任でもある。

ースキー場を活用したスポーツイベントの具体的事例1ー

『長野県大町市での取り組み(2000年～2009年)』

<北アルプス山麓AdventureGamesu2001>

ー地域資源を活用した参加型スポーツイベントー

【問題・目的・背景】

近年、少子高齢化や過疎化、地場産業の衰退、農家の後継者難などによって、いわゆる地方の衰退が進んでいる。しかし、地方には豊かな自然や産物(食材)、地域住民の心優しいもてなしなど、様々な資源(財産)があふれていることに気づく。本研究では、こうした地域資源を活用し、ボランティア・スタッフによって運営される「参加型スポーツ・イベント」が地域活性化にもたらす可能性(効果や課題)について、長野県大町市で開催されるアウトドア・スポーツ・イベントをケースとして論じていく。

【研究方法・研究内容】

発表者である矢口が主催する「元気・まちネット」は、長野県大町市で「北アルプス山麓Adventure Games」と称するスポーツ・イベントをボランティア・スタッフのみで10年にわたって開催してきた。これは、北アルプス山麓に広がるスキー場と周辺の里山を活用し、3人1組で知力(地元

の自然・歴史・文化などへの知識)、体力、チームワークを競うもので、一流のアスリートだけでなく、女性同士や親子連れといった一般の人でも気軽に参加できるアウトドア・スポーツ・イベントである。このスポーツ・イベントの成果について、同様の他の参加型スポーツ・イベントと比較検討していくことで、ボランティア・スタッフによって運営される参加型スポーツ・イベントが地域活性化にもたらす可能性(スタッフや参加者、地域社会への効果や課題)について検討していく。

【研究・調査・分析結果】

「北アルプス山麓 Adventure Games」の10年間の成果を整理し、他の参加型スポーツ・イベントと比較検討することで、地域資源を活用し、ボランティア・スタッフによって運営される参加型スポーツ・イベントの継続的な開催は、①都市と地方との交流促進(ボランティア・スタッフや参加者、地域住民間の交流)、②地域ブランドの育成(地域の自然・歴史・文化などへの認知度や好感度の向上)に一定の効果をもたらすことが改めて明らかになった。

【考察・今後の展開】

本研究から得られた課題としては、都市住民を中心とするスタッフや参加者と、地域住民とが一体になった企画・運営、とりわけ地域住民の理解と支援にもとづく地域資源の掘り起こしと活用を継続的に進めていくことが挙げられる。また、運営ノウハウの蓄積と応用による様々な参加型スポーツ・イベントの普及と、その社会・経済的効果の検証を進めていく必要がある。

ースキー場を活用したスポーツイベントの具体的事例-2ー

『長野県飯山市での取り組み(2010年～)』

＜戸狩とんトレ駅伝＞

【背景(その1)】

市町村合併の動きは2003年(平成15年)から2005年(平成17年)にかけてピークを迎え、1999年(平成11年)3月末に3,232あった市町村の数は、2006年(平成18年)4月には1,820にまで減少した。2010年政府主導の合併推進運動は正式に終了することとなりました。

政府などが掲げる合併推進の目的はおおむね以下の通りであります。

- ・ 地方分権に対応して基礎自治体の財政力を強化出来る。
- ・ モータリゼーションの進展に伴う生活圏の広域化に対応出来る。
- ・ 政令指定都市や中核志・特例志になれば権限が委譲される。

果たして平成の大合併は地域に「真の豊かさ」をもたらしたのだろうか。否と言わざるを得ません。

【背景(その2)】

戸狩スキー場は「民宿の戸狩」として全国のスキーファンに愛されてきましたが、1990年代始めのバブル崩壊とともに年々スキー、スノーボードの客離れが加速し、戸狩スキー場もウィンターシーズンからグリーンシーズンへと新たな観光振興策を見出さなければならなくなりました。(ちなみに1990年代50万人だったスキー客は、現在18万人とピーク時の36%まで落ち込んでいる。)

だが戸狩エリアには良好なブナ林を始めとして、お小夜滝・不動滝とコバの清水や日光ゆき清水などの自然、名水に恵まれた自慢の温泉、神社・仏閣なども多く、歴史・文化遺産など観光地と

しては申し分ない恵まれた地域であります。

これらの豊かな地域資源を見つめ直し、健康・環境・観光を「3Kの時代」として位置づけ、21世紀に向けた新しい地域振興策を展開しなければならなくなりました。

2010年1月、戸狩観光㈱支配人：伝刀氏より、下記のキーワードを達成可能なイベントの依頼がありました。

◇戸狩文化祭のキーワード

<依頼されたイベント内容>

- ・ 「秋の戸狩」をメインに集客・宿泊の見込めるイベント開催
- ・ キーワード:「紅葉」「トレイル」「収穫の秋」「祭礼」「交流」
- ・ 一年を通して集客可能なイベントとする。
- ・ 2010年秋を第一回として、継続可能なイベントとする。

【最近のスポーツイベントの現状分析】

近年、ウルトラマラソン、トライアスロン、トレイルマラソン(通称:トレラン)、ウオーキング、アドベンチャーレース、オープンウォータースイムなど、地域資源を活用したアウトドアスポーツが各地で開催されていますが、主催者側が「環境」や「地域活性化」を基軸に置いたスポーツイベントは果たしてあったでしょうか？否と言わざるを得ません。

まちづくりグループ「元気・まちネット」は、すでに2010年8月から「健康・環境・観光」を基軸としたアウトドアスポーツイベントを長野県大町市仁科三湖周辺を舞台にして「北アルプス山麓AdventureGames2001」、「仁科三湖縦断アドベンチャースイム&ラン」を、首都圏に在住・在勤するボランティアスタッフで自主・運営してきました。その功績が評価され2009年7月、東京市ヶ谷の法政大学で開催された『地域活性学会/第一回研究発表会』で地域活性化の事例発表を行うことが出来ました。

【アウトドアスポーツイベントの提案】

東京への一極集中や市町村合併などで、益々地方の財政が逼迫している状況を踏まえ、首都圏や関西・中部圏、北陸圏からもアクセスがしやすく、風光明媚なロケーションを持ち、併せて笹ずしや信州みゆきパーク、雪割りそば、北光正宗など食文化の宝庫である戸狩地区に於いて、とん平高原(戸狩スキー場)に設置される4つのトレイルコースを活用した「仮称:とん平トレイル駅伝大会/通称:とんトレ駅伝」を開催する事によって、戸狩地域の活性化及び環境との共生に寄与できるものと考えます。

【戸狩とん平トレイル駅伝大会/通称:とんトレ駅伝とは・・・】

とん平高原(戸狩スキー場含む)には4つのトレイルモデルコースが存在します。これらのコースを活用した山岳マラソンに①「駅伝の要素」と戸狩の②「謎とき/クイズ」を加味した至ってシンプルで日本では初となるアウトドアスポーツイベントです。

加えて本大会が環境を一つのテーマとしていることから、優勝者(団体・親子・個人)には、③**記念樹**のヤマザクラ、リンゴ、ブナの苗木を提供して、この地に植林して貰うことで、優勝者の栄誉を讃えながら、エリアの環境保全・保護にも寄与していけるものと確信します。

【今後の展開・課題】

長野県信濃町の斑尾山(標高 1350m)と新潟県天水山(標高 1088m)には、関田山脈が横たわっています。ちょうど中間地点にあたるとん平高原(戸狩スキー場)の上部は、仏ヶ峰(標高 1140m)が鎮座し、とん平高原を含む周辺には良好なブナ林を形成しています。

これらの豊かな自然を保全・保護・管理していくには膨大な時間と労働力に加え、多額な資金が必要となります。とても地元の皆さんのボランティアに頼るだけでは継続・保全していけないものではないと考えます。

私たちはこのスポーツイベントを通じて、持続可能な資金を提供出来たらと考え、エリアトラスト運動を展開していくことを考えています。

＜エリアトラスト運動とは・・・＞

『身近な自然と歴史的環境を守る。価値ある美しい自然や歴史的建造物とその環境を寄付金などによる買い取り、または寄贈、遺贈などで取得し、これを保全・維持・管理・公開することで、次世代に残していくことを目的とした市民運動です。』

とん平高原を含む戸狩エリアの豊かな自然環境の保全・育成を推進するために、ボランティア活動の趣旨に賛同して頂いた、個人、団体、企業からの寄付や募金による「とん平高原の森トラスト基金」を創設して持続可能な自然環境の保全・育成に努めます。

＜具体的提案＞

戸狩地区(とん平高原含む)に住み、企業活動をしている個人、団体の他、観光などで訪れたお客様に「エリアトラスト運動」の趣旨をご理解頂き、トラスト募金箱に喜捨して貰います。

また宿・レストラン・食堂などのメニューに「トラスト基金メニュー」として、食事や飲み物に10円又は20円程度プラスした価格を表示して貰い、「トラスト基金メニュー」をご注文して貰った分だけ「トラスト基金」に積み立てます。

こうして積み立てられた基金を、戸狩地区(とん平高原含む)ひいては信越トレイルの環境保全・育成などに役立てられるような仕組みを考えています。

こうした背景を踏まえて企画されたイベントが『戸狩トレイル駅伝大会』です。

＜今後の課題・希望＞

「元気・まちネット」は、「戸狩とんトレ駅伝」を通じて、長野県内のスキー場を含めた「地域活性化」のモデル事業の一例となればと考えています。

―スキー場を活用したスポーツイベントの具体的事例-3-

【蔵王での取り組み(2011年12月～)】

―旧白洲次郎山荘(ヒュッテ・ヤレン/三宅山荘) “鎮守の杜”構想の実現に向けて―

【始めに】

1951年(昭和26年)から1959年(昭和34年)東北電力初代会長に就任した白洲次郎は樹氷の蔵王をひと目で気に入り「東洋のサンモリッツ」にしようとする当時の県知事や山形市長に提案、自らも

イギリス留学時代に訪れたスイスサンモリッツの山荘を彷彿とさせるヒュッテ・ヤレン(現三宅山荘)を1957年(昭和32年8月竣工)蔵王スキー場に建てスキーを楽しんだ。

山荘は木造2階建て約70㎡(約21坪)の小さな山荘だが、1階には暖炉と広い居間、2階は広いテーブルの置かれたオープンキッチンと蔵王の寒さを考慮した二重の窓に雨戸など当時の日本では考えられなかった造りとなっている。

周囲には白洲次郎が持ち込んで自ら植えたと言われるハコヤナギ(通称:ヤマナラシ)を始めとしてカミザクラやコナラ、クスギなどが植えられ、白壁と焦げ茶色した柱の山荘との組み合わせは自然と建物がスッキリと調和し、一見なにげなく見える景観はプリシブルな男白洲次郎のセンスの良さが伺える。

【背景】

日本の国土は周囲を海に囲まれ、国土の6,7割は森林に覆われているが戦後の経済復興のかけ声と共に多くの森林が伐採、生態系を無視したスギやヒノキなどの森林が目立つようになった。

1987年、内需振興のかけ声によりリゾート法(総合保養地域整備法)が制定され、各地方が民間企業とリゾート開発に血眼になった。しかしバブル崩壊等の影響を受け、それら多くの開発は頓挫、乱開発のツケが負の遺産(ホテル施設や荒れ果てたスキー場)として見るも無惨な姿をさらけだし、折角の自然景観やまち並み壊している。

旧白洲山荘(ヒュッテ・ヤレン)は白洲次郎から旧山形交通株式会社(現ヤマコー株)を経由して東京在住の故三宅馨氏が1963年(昭和38年)に購入、昭和26年頃大学生を対象にスキー教室を開いたのが初めである。大学の自然スポーツコースを強く提唱し、一生出来るスポーツ、働く者も参加しやすいスポーツを学生に体験させることを目的で実行に移して行った。

1978年(昭和53年)三宅氏は山荘の近くに「蔵王上ノ台ロッジ」を運営するようになり、山荘の利用は次第に薄れていった。

【現状】

2006年(平成16年)NHKの「その時、歴史が動いた」がきっかけとなり、旧白洲次郎山荘が俄に脚光を浴びるようになり、地元関係者による「白洲次郎を語る山形の会」が結成された。

そして地元温泉関係者が所有者の三宅泉氏(東京在住)に「蔵王温泉の活性化」に活用させて欲しいと願い出て、周辺環境整備を行い、案内板などの設置を行った。

しかし木造2階建ての山荘は築55年以上が経過して老朽化が目立つようになり、それを危惧したNPO法人元気・まちネット(以下元気・まちネット)が所有者の三宅泉氏に「山荘の保存・活用」に向けた募金活動の展開を願い出て快諾を頂いた。

元気・まちネット(代表矢口正武/ランドスケープアーキテクト/スキーヤー)は仕事仲間の建築家塩田能也氏に協力を依頼、木造の構造専門家、施工の専門家で「蔵王プロジェクトM・J」(三宅山荘、ヒュッテ・ヤレン/hutte・jaren)を立ち上げ、山荘内・外観の建築診断を数回にわたって行い、12/10(土)蔵王温泉に於いて『旧白洲次郎山荘と蔵王を語るミニフォーラム』を東京や仙台から60名を越える参加者を招いて開催した。

【課題】

- ① 募金活動を開始するにあたり、まだまだ解決しなければならない課題は多い。
- ② 協賛して頂いたお金の管理団体の創設(期限付き)
- ③ 蔵王温泉観光協会、白洲次郎を語る山形の会、所有者三宅氏を始めとした関係者との調整
- ④ 敷地確定図の作成やレベル測量の実施
- ⑤ 建物診断の詳細調査や耐震診断による耐震構造の検討、工事費概算など
- ⑥ 山荘の活用方法によるその後の維持管理・運営
- ⑦ その他

以上の項目についてしっかりとロードマップを作成してこのプロジェクトにあたらなければならない。

【鎮守の杜構想】

蔵王温泉観光協会元会長の故伊東秀幸氏は「古き良き湯治場、長期滞在型のリゾート地の復活がいいと思う。それには樹氷資料館とか白洲次郎さんの山小屋とかが必要と思う」
またスキー界の重鎮岸英三氏は「ヨーロッパのスキー場に向かう道路には“何とかスキー場”なんていう看板はない。スキー場なんていうのは雪があるからスキー場だろう。蔵王はスキー場に集中しすぎて来た。春・夏・秋・冬いつでもいらっしやい。って、ことだよ」
(やまがた街角 2006 年 12・07 年 1 月号特集)に寄せている。)

鎮守の森というのは、かつては神社を囲むようにして、必ず存在した森林のことで杜の字をあてることも多い。(ここでは敢えて杜を使用)
神社を遠景から見ると、たいていはこんもりとした森があり、その一端に鳥居がある。鳥居から森林の内部に向けて参道があり、その行き当たりに境内や本殿があり、その背後には森林の中央部が位置するようになっていて、森の深い方に向かって礼拝をする形になっている。
このことから「社(やしろ)」が先に在ったのではなく、信仰された森に社が建てられたことが良くわかる。

鎮守の杜とは本来、森林や森林に覆われた土地、山岳(霊峰富士や山形であれば蔵王権現や出羽三山など)・巨石や海や河川(岩礁や滝など特徴的な場所)など自然そのものが信仰の対象になっている。ーウィキペディアより抜粋ー

蔵王プロジェクトM・Jは先人の残した“精神性”を大切にしながら、この旧白洲次郎山荘を「鎮守の杜＝核」として位置づけ、このエリアから「スキー場一辺倒」の考えから脱し、「山岳・温泉保養地＝蔵王＝東洋のサンモリッツ」の蔵王温泉としての転換を図りたいと考えている。

<スキー年表>

年号	年齢	スキー・他	その他
1967年(昭和42年)	20歳	初めて蔵王スキー場で滑る	
1969年(昭和44年)	22歳	戸隠高原プロスキースクールに入校	
1972年(昭和50年)	25歳	SAJ1級取得(石川秀雄) WSC:ワンダラーズスキークラブ設立	札幌冬季オリンピック
1975年(昭和41年)	28歳	SIA助手検定合格	
1987年(昭和62年)	40歳	総合保養地域整備法(リゾート法)制定 雑誌:極楽スキー(1)発売	
1988年(昭和63年)	41歳	映画「私をスキーに連れてって」公開 ISSC:石井スポーツスキークラブ設立	
1989年(平成元年)	42歳	雑誌:極楽スキー(2)発売	長野冬季オリンピック
1992年(平成04年)	45歳	スキーとトライアスロンのチーム BEARS設立	1991年バブル崩壊
1999年(平成11年)	52歳	Mt、6設立(蔵王、草津、志賀高原、白馬・八方、赤倉・妙高高原、野沢)	
2000年(平成12年)	53歳	北アルプス山麓AdventureGames2001開催	長野県大町市
2003年(平成15年)	56歳	仁科三湖縦断アドベンチャースイム&ラン開催	長野県大町市
2006年(平成18年)	59歳	テレマークスキー始める 旧白洲山荘(ヒュッテ・ヤレン)を知る	妙高高原
2007年(平成19年)	60歳	第1回「マウンテンリゾート活性化のための環境会議」シンポジウム開催	池袋サンシャインシティ
2008年(平成20年)	61歳	第2回「マウンテンリゾート活性化のための環境会議」シンポジウム開催 NPO法人元気・まちネット設立	ニセコスキー場(H東急)
2009年(平成21年)	62歳	地域活性学会/第一回研究発表会発表	法政大学(市ヶ谷)
2010年(平成22年)	63歳	第1回:戸狩とんトレ駅伝プロデュース 北アルプス山麓の健康・環境・観光を考えるシンポジウム開催	長野県飯山市 長野県大町市
2011年(平成23年)	63歳	旧白洲次郎山荘保存・活用の会設立	
2012年(平成24年)	65歳	雑誌「大人のスキー2012」に特集 雑誌「やまがた街角」秋号に特集	